

言語発達初期にみられる「名詞＋は？」の「は」の分析*

松藤 薫子

日本獣医生命科学大学 英語学教室

要約

本論文では、子どもが言語発達初期に発する「名詞＋は？」の「は」が何を表す標識であるのかを検討した。子どもは、日本語文法を発達させる過程の第一段階である2歳前から定型表現「名詞＋は？」を上昇イントネーションで質問をし始める。その表現は名詞で表される指示物の説明のつかない部分に気づき、その点を聞き手に説明するように要求するために、その後平叙文「名詞＋は＋名詞」や平叙文の一部「名詞＋は」を発するようになる。「名詞＋は？」の「は」は主題の「は」と考えられてきたが、2歳の発話にみられる言語的特徴、「は」の音声上の特徴、使用状況の観点から、対比の「は」であると議論した。野田（1996）が提案する説（主題と対比の2つの用法はプロトタイプ理論に基づき連続的である、主題の「は」は構造上その前と後を大きく2つの部分にわたる性質を持つ）を踏まえ、子どもは2歳以降に対比の度合いに対応した表現や主題の「は」の構造上の性質を獲得する必要がある。

キーワード：日本語、子どもの言語発達、主題の「は」、対比の「は」

1. はじめに

日本語を習得していく子どもの言語発達過程の初期段階である2歳前に、(1)のような発話が観察される。

(1) パパは？

(Clancy 1985: 381)

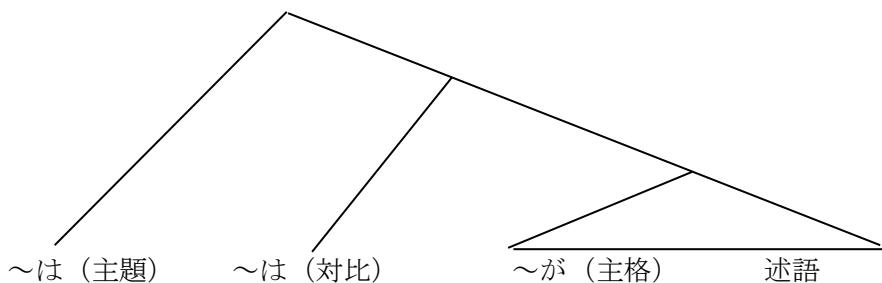
(1)は、父は通常ここにいるが、今ここにいないがどこにいるのだろうかと子どもは思い、いなくなってしまった父の場所をたずねる発話文である。Clancy（1985）は(1)で使われている「は」を主題の助詞または主題の標識（topic particle / marker）と記述している。子どもが発話する「パパは？」の「は」は大人が発する「お父さんはどこにいるの？」で使われている「は」と同じであろうか。

本論文では、日本語文法の「は」と子どもが言語発達初期に発する「名詞＋は？」の「は」を比較し、その時期に使われる「は」の特徴を明らかにし、「は」が何を表す標識であるかを提案する。

2. 日本語文法

「は」には主題の用法と対比の用法がある（野田 1996）。南（1974）などによって提唱された文の階層構造のモデルを基に、「は」がもつ文の構造は(2)のようにいくつかの階層が順に重なって表されると本論文では仮定する（野田 1996, Miyagawa 2017）。

(2) 日本語の文の階層構造



一番下の△で示した階層が実質的意味を表し、その上の対比の「は」は肯定否定の階層のもので、その上の主題の「は」は事態に対するするムードの階層のものであると考える（そのように考える根拠は野田（1996: 283-285）を参照）。主題の「は」を持つ文の生成の仕方に関しては、文を主題とその他の部分に二分する「は」の節点をどのように作るかについて、i) 移動説 ii) 複写説 iii) 基底説 iv) 複合説がある。他方、対比の「は」は、基底で対比を表すと指定された成分につくと考えられる（概要は野田（1996: 288-290）を参照）。

2.1 主題を表す「は」

主題の「は」は聞き手にとって関心がありそうな名詞の後について、その名詞がその文の主題を示す働きをする。主題とはその文が何について述べるのかを示すものである。

(3) 子どもたちがカレーを作っています。

- (4) a. 子どもたちはカレーを作っています。
b. カレーは子どもたちが作っています。

(3)は動作を行う主体「子どもたち」が動作の対象「カレー」を動作「作っています」という内容を表す。(4a)(4b)では「が」または「を」の格を表す名詞が文の主題になり、文の主題を表す助詞「は」が使われている。

(4)のように書きことばで記される「は」は、話すことばでは強勢（stress）を置かずに発音される（Miyagawa 2017: 20）。

話すことばでは(5)のように無助詞になりやすい。例文の中のⒶは助詞がついていないことを表す。

(5) 母：今日ね 子どもたちが お昼のことなんだけど カレーが 作ったんよ。おいしかった。

父：食べたかったなあ。

(5)の母の発話を書き言葉にすると、「今日、子どもたちは、お昼に、カレーを作った。おいしかった」のようになるだろう。(5)のように、家族の会話が生活の場に密着した具体的な話をするような文体に近づけば近づくほど無助詞になる傾向がある。

2.2 対比を表す「は」

対比の「は」は他のものと比べて、「他のものはそうではないが、これはこうだ」というような意味を表す。

(6) 子どもたちはカレーは作ったが、ごはんは炊かなかった。

(6)では「カレーは」と「ごはんは」に対比的な意味が強く表出している。

(7) 母：子どもたち カレーは作ってくれたんだけど ごはんは炊いてくれなかつたんよ。 もお、カレーだけで食べたんよ。

父：ふーん。レトルトのごはん なかつた？

対比の意味をはっきり表したい場合、家族間で使われる典型的な話すことばでも「は」が使われ、強勢 (stress) を置いて発音される (Miyagawa 2017: 20)

2.3 2つの用法の関係

上記でみた「は」の主題の用法と対比の用法の関係をどのように捉えるかについては、
i) 対比派生説 ii) 主題派生説 iii) 構造本質説 iv) 意味本質説 v) プロトタイプ説等がある。野田 (1996) は i) ii) の基本・派生の考え方を取らず、iii) iv) v) の長所を取り入れ vi) 複合説を提案する。つまり、プロトタイプ論の考え方に基づき、2つの用法の間には、一方で典型的な主題があり、もう一方で典型的な対比がありその間に中間的な（複数の）用法があるととらえ、「は」は潜在的に(8)のような性質を持ち合わせていると考える。

(8) a. 構造的には、その前と後を大きく2つの部分にわける

b. 意味的には対比の意味をつけてわえる

(野田 1996: 275)

(8a)の性質が強いと主題を表し、(8b)の性質が強いと対比を表すことになる。どちらの性質が強くでるかは、「は」がついた成分の位置、種類、発音等で決まる。主題と対比の両方

を表す「は」は(8a)(8b)の両方が強く表れた結果であり、対比の意味の強弱は(8b)の性質がどれだけ強く現れたかによるものとみなす。以上のような性質も持つ文が(9)-(11)である。

(9) ゴリラは、毎日昼と夜の二回寝床をつくって寝る。 (立花 1991:207, 野田 1996:119)

(10) a. 私は肉は好きだが、魚は好きではない。

b. 兄は肉が好きだが、弟は魚が好きだ。

(野田 1996:200)

(11) a. 子どもたちはカレーは作っています。

(野田 1996:211)

b. 子どもたちはカレーは作っていません。

(9)はゴリラの習慣を表す文で、構造的には「ゴリラは」という部分と習慣を述べる部分に分けられる。「ゴリラは」の「は」は主題を表す。(10a)の「肉は」と「魚は」の「は」は対比を表し、主題は表していない。(10b)の「兄は」「弟は」の「は」は主題を表し、そして逆説の接続助詞「が」が使われた対比構文の中にあるために、対比の意味も表している。(11a)の「カレーは」の「は」が表す対比の相手は表されていないが、想定しやすく、例えば「サラダは作っていない」「ごはんは炊いていない」などと対比される。(11b)の「は」は否定文で使用され、対比の相手が想定しにくく、(11a)の「は」に比べて対比の意味が弱い。

3. 子どもの「名詞+は?」の特徴

子どもの言語発達初期にみられる「名詞+は?」の特徴を Clancy (1985) , Kurumada (2009) , Takagi (2021) に基づき概観する。

3.1 Clancy (1985)

Clancy (1985) は子どもの日本語文法の発達過程の第一段階を 2 歳前からとし、その段階に、少なくとも命令形と過去形を含むある特定の動詞の屈折の対照的な使用と、最も一般的な 3 つの終助詞「よ」「ね」「の」の使用がみられる記述する。その段階に、「パパは?」のような発話があると報告する。この発話の特徴は(12)のように整理できる。

(12) a. 名詞の後の「は」は尻上がりイントネーション

b. 「は」は発話時に存在しない人や物の場所を尋ねるために使われる。

c. 「は」は食べ物やおもちゃなどが配られるときに、その人（たいていは子ども自身）にも配られるのかどうかを尋ねるために使われる。

d. 質問一応答のやり取りの中で使われる。

ある子どもは、まず「は」を「パパは？」のような疑問文の中だけで使用し、その後平叙文では(13)のように大人の「名詞+は？」を含む質問に対して、答えのなかで「名詞+は」を使った文を発話した。

- (13) a. 母：ママは？ 子：ママはこれ
b. 大人：こっちは誰？ 子：こっちはねーさん (Clancy 1985: 496)

Clancy (1985:494) は子どもは直前の発話を使って自分の文を作り上げており、このような質問一応答のやり取りは「は」を含め助詞の獲得に重要な役割を果たしているのかもしれないとして示唆した。また「は」を主題標識 (topic marker) と記述した。

3.2 Kurumada (2009)

Kurumada (2009) は用法基盤アプローチ (Tomasello 2003) に基づき、CHILDES コーパス (Oshima-Takane et al. 1998; MacWhinney 2000) から 3 人の男児 Aki, Ryo, Tai (1;6)-(2;11) とその母親たちの対話データを用いて、「名詞+は？」の使い方を考察した。(1;6)は 1 歳 6 ヶ月を表す。

Bates and MacWhinney (1979) は、子どもは「主題・解説構造」を文で構成できるようになる前に、発話には主題があり、主題に対する解説が続くというような概念を理解するようになることを示した。Miyata (1992) は子どもが使う「名詞+は？」は一種の WH-疑問文であり、子どもはそれを使って名詞についてさまざまな情報を尋ねると指摘した。

以上の先行研究の知見を踏まえ、Kurumada (2009) は発話データを検討した結果「名詞+は？」の使用には(14)のような特徴があることを明かした。

- (14) a. 定型的な表現
b. その表現は尻上がりのイントネーション
c. 2 歳あたりに「（普通・親族・固有）名詞+は？」に加えて、名詞の位置に指示代名詞も使うようになる。
d. 3 歳 11 ヶ月に一文の中ではなく対話の中で、まず尻上がりのイントネーションのない「名詞+は」を発し、その後述部のある発話をする。
e. 母子で交互に会話をを行う様式の中で使われる。

(14c)(14d)の発話例はそれぞれ(15)(16)である。

- (15) Aki (2;6) : これは？

母： ありさん

- (16) 母：ジェームスは？

Tai (2;6) : ジェームスは？

母： うん
Tai：ジェームスは
母： うん
Tai：かつてなかった
母：ふうん

(15)では Aki が指示代名詞「これ」を使用し、「これは？」と母に質問すると、母が指示物の名前アリさんと応答した。(16)では、きかんしゃトーマスシリーズのおもちゃの1つについて「ジェームスはどう思う 好き？」という内容を「ジェームスは？」という表現で母が尋ね、まずは Tai はその表現を繰り返すが、次の「ジェームスは」は尻上がりのイントネーションはない発話をし、さらに次の発話で述部「買ってなかった」と述べた。

Kurumada (2009) は「名詞は？」は子どもが聞き手に名詞で表される指示物に注意を向けさせ、指示物についての解説を求めるという伝達機能を持ち、この指示的な行為はしばしば主題を提示するという役割をすると指摘した。「主題・解説構造」はまず質問一応答のやり取りとして実現され、大人の発話や談話上の文脈が利用されて子どもの言語知識に徐々に内在化されていくと主張した。

3.3 Takagi (2021)

Takagi (2021) は会話分析 (Garfinkel 1967, Schegloff and Sacks 1973, Sacks and Schegloff 1979, Sacks 1992) の観点から、男児 Keisuke, 女児 Ai, Yasuyo, Chii (1;11)-(2;9)がそれぞれのいる 4 家族の日々のやりとりがビデオに録画されたデータを用いて「名詞+は？」の使い方を考察した。

「名詞+は？」は(17)のような 3 つの状況の時に使われると主張した。

- (17) a. 「名詞+は？」の名詞は発話の場面にいない人や物を指す。
b. 「名詞+は？」の名詞は目の前の場面に存在する物を指す。
c. 「名詞+は？」は繰り返し使われる。

「名詞+は？」は、子どもが名詞で表された指示物についてある特定の時期に説明のつかない側面に気づき、その点を説明してくれるよう聞き手に要求するために使われると指摘した。(17a)の名詞で表される指示物の説明のつかない点とは、その指示物はこれから起こる出来事に必要な物や人であるのに欠如しているということである。

(17b)では、物は存在しているがその物の存在に子どもが納得していない部分がある。例えば、カバンの持ち主が去った後、いつもはカバンも一緒になくなるのだが、その場にあるためなぜあるのかの説明が欲しいと子どもは考える。(17c)は(17a)(17b)のサブタイプの可能性を示唆し、指示物が同じ部類の構成員かが不明であるためそれを問うものである。

以上をまとめると子どもの「名詞+は？」の使い方は(18)のようになる。

- (18) 子どもが名詞で表される指示物の説明のつかない部分（次如・存在・同類としての利用可能性）に気づき、その点を聞き手に説明するように要求するために、上昇イントネーションつきの「は」を名詞につけることによって質問を投げかける。

「は」によって示されていることは、聞き手が今この場面と名詞で表される指示物が関連していることを察知できるはずだという話し手の気持ちの表れだとし、少なくとも部分的には話題性（topicality）を構成する指示物に「は」がつくと指摘した。主題として重要でありそうな指示物の名詞句と「は」が結びついていると考えられ、「は」は不完全ながら主題を表す助詞と言えそうある。

3.4 先行研究のまとめ

上記の3つの先行研究から「名詞+は？」の使用の特徴をまとめると(19)のようになる。

- (19) a. 時期：日本語文法の発達過程の第一段階である2歳前から使われ始める。
b. 音声：尻上がりのイントネーションが使われる。
c. 使用状況：(18)
d. 形式：定型表現「名詞+は？」
e. やり取りで使用：大人からの「名詞+は？」の疑問文に対する答えとしてi)「名詞+は+名詞」や、ii)「名詞+は」を発し、次に「名詞+は」に対するii')述部を発する。

発達初期段階に(19)の特徴を持ち、そのような特徴を説明しうるその時期の「は」の分析を4節で検討する。

4. 「は」の分析案

3つの先行研究では、言語発達初期段階で使われる「は」は（大人とは同じではないだろうが）主題を表す助詞と考えられた。4節では、「は」は対比を表す助詞であることを主張する。

4.1 「名詞+は？」が使われる時期にみられる言語的特徴：実証的・理論的考察

「名詞+は？」は日本語文法の発達過程の第一段階、2歳前から使われ始める。日本語の習得過程を報告している大久保（1967, 1975）は、1歳前後は一語文の時期、1歳半前後は二語文の発生期、2歳前後は第一期語獲得期、2歳半前後は多語文・従属文の時期と分類した。2歳前後は、「名詞句+述部」の二語文が多く、直接目的語・間接目的語・場所などを含む多語文を使い始めるようになる（松藤 1992）。発達初期段階には、a) 終助詞

「ね」「な」「よ」「の」が述語一語文の初出期の1歳半ごろから使われ始める, b) 格助詞は使用されない, c) 形容詞のイ形(現在終止形)が「名詞+形容詞」で主語・述語関係、「形容詞+名詞」で修飾関係を表すなどの特徴がみられる(今西 1993)。物や人の名前、状態、性質、動作、存在、非存在、出現、消失、要求などを名詞、形容詞、動詞で表すとともに、話者の気持ちを(強勢を置き語末につける)終助詞で表す。Clancy (1985) は幼児の終助詞の早期使用には、幼児が感情状態を表す単純なことばに強く影響を受けるためではないかという可能性を示唆した。

成人文法の主題「は」を統語構造で示す場合、TOP という範疇を仮定する分析がある(Miyagawa 2017)。統語構造を樹形図で表すと、TOP は上部かつ左端に位置し、獲得が遅いことが報告されている(Friedmann, Belletti and Rizzi 2021, Meira and Grolla 2024)。これらの論文は Growing Trees 仮説(統語構造は下から上へと成長する Friedmann, Belletti and Rizzi 2021)を踏まえ TOP は樹形図の上部であるため獲得が遅いことが予測され、ヘブライ語(Hebrew)を話す子どもの発話資料とブラジル・ポルトガル語(Brazilian Portuguese)を話す子どもの発話資料でそれぞれ検証され、その仮説が支持されたという研究である。日本語の主題を表す「は」に当てはめると、「は」は TOP という範疇の一員であるため、主題の「は」の獲得も遅いのではないかと推測される。

2.1 節で示したように、主題の「は」は、名詞などが持つような具体的な意味を持たず、文を二分し、主題と解説に分けるという構造的な役割がある。この時期に使われる「名詞+は?」の「は」は主題を表すというより、終助詞に似た特徴を持つものではないかと考えられる。

4.2 「名詞+は?」の「は」の音声上の特徴

2歳前から発話される定型表現「名詞+は?」の中で使われる「は」には強勢があり尻上がりのイントネーションである。

大人が持つ話題を表す「は」の音声上の特徴は、2.1 節で見たように、生活の場での話し言葉である場合は、無助詞になる傾向がある。2歳の子どもは書き言葉ではなく生活の場での会話から言語を習得する。音声形のない特徴を持ちうる「は」を子どもが習得し発話するのは困難であると考えられる。

4.1 節で指摘したように「は」と似た特徴のあるものとして終助詞がある。似ている特徴とは、使われ始める時期、話者の気持ちを表す、強勢がある、語末に使われるである。終助詞と同様「は」は発話内容に話者の心的態度(感情、意図、信念、願望など)、法性(モダリティ)に関わる情報が含まれていると言ってよいだろう。

4.3 「は」の使用状況

(18)でまとめたように、子どもが「名詞+は?」を使う前提として、子どもは名詞で表される指示物の説明のつかない部分(欠如・存在・同類としての利用可能性)に気づく必要がある。子どもは会話をしている環境において、自分が納得している部分と説明できない部分を判別していることになる。例えば、子どもの目の前に物がたくさんある。1つ以外の物の特徴は分かっているが、その1つの物で遊んでいいかわからない場合や1つ以外

の物は自分の物であるとわかっているが、その1つは自分の物でいいのかわからない場合に、「これは？」を使う。また、通常、姉はこのかばんを持って出かけている。しかし今日は姉がいないのに姉のかばんがある。そのかばんはないはずだが、そのかばんが存在する。なぜだろうという気持ちから「これは？」と発話する。

子どもが様々な言語知識をどのようにして習得するのかに関して、対比による推論 (Contrast Inference: Perez-Leroux 2024: 20-25) が提案されている。その推論は、語で表される意味の獲得や文法獲得などに働く原則（例：事物は唯一の範疇に属するものと仮定される。範疇は相互に排他的であるという範疇化に関する一般原則 Mutual Exclusivity (Markman and Wachtel 1988) や1つの深層構造は1つの表層構造につながるという唯一性の原則 Uniqueness Principle (Wexler and Culicover 1980)）だけでなく、様々なレベル（語彙・文法・意味・語用など）の言語知識の習得に適応されると指摘する。

対比による推論が働くことにより、子どもは自分の知識からの予測と現状を比較して、指示物の説明のつかない部分を抽出し、その部分を明らかにしたいという欲求から「名詞+は？」を使用する。子どもの「は」の使用については、自分の脳内で行っている比較・抽出する作業結果を、対比を表す「は」に結び付け、説明のつかない部分を明らかにしたいという欲求を語末の強勢つきの「は」に結び付けたと考えるのが妥当である。

5. まとめ

日本語文法の「は」を踏まえて、子どもが言語発達初期に発する「名詞+は？」の使用の特徴を考察し、使用時期・音声上の特徴・使用状況の観点から、「は」は主題ではなく対比を表すことを提案した。

日本語の発達初期に子どもが対比の「は」を獲得した後、大人の使用ができるようになるまでには、野田の提案した複合説によると、対比の度合いに対応した表現（対比の相手を明示したり対比の相手を表さないが対比を感じさせたりするような表現方法）や主題の「は」の前と後を大きく2つの部分にわける構造上の位置を獲得する必要がある。また松藤（2024）では日本語児は主題卓越型言語の特徴を言語発達の早期に獲得することから、その特徴の早期獲得と複雑性の法則が影響して、日本語には二重主語構文があり外的所有構文がみられないという主張をした。主題卓越型言語の特徴の1つに主題を表す「は」の使用がある。子どもがいつどのようにして主題の「は」を使うことができるようになるのかに関する実証的・理論的研究は今後の課題とする。

* 本研究は助成を受けていない。

本論文に関して、開示すべき利益相反関連事項はない。

引用文献

- Bates, E. and MacWhinney, B. (1979). A Functional Approach to the Acquisition of Grammar. In Ochs, E. and Schieffelin, B. (eds), *Developmental Pragmatics* (pp. 157-211). Academic Press.

- Clancy, P. M. (1985). The Acquisition of Japanese. In Slobin, D. I. (ed.) *The Crosslinguistic Study of Language Acquisition, Volume 1: The Data* (pp. 373-524). Lawrence Erlbaum Associates.
- Friedmann, N., Belletti, A. and Rizzi, L. (2021). Growing Trees: The Acquisition of the Left Periphery. *Glossa: A Journal of General Linguistics* 6 (1): 131. 1-38.
- Garfinkel, H. (1967). *Studies in Ethnomethodology*. Prentice-Hall.
- 今西典子 (1993) . 「発達の初期の段階の文法に関する一考察」 『お茶の水女子大学人文科学紀要』 46, 159-172.
- Kurumada, C. (2009). The Acquisition and Development of the Topic Marker *wa* in L1 Japanese. In Roberta, C. et al. (eds.), *Formulaic Language, Volume 2 Acquisition, Loss, Psychological Reality and Functional Explanation* (pp. 347-374). John Benjamins.
- MacWhinney, B. (2000). *The CHILDES Project: Tools for Analyzing Talk (3rd edition)*. Lawrence Erlbaum Associates.
- Markman, E. and Wachtel, G. F. (1988). Children's Use of Mutual Exclusivity to Constrain the Meanings of Words, *Cognitive Psychology* 20 (2), 121-157.
- 松藤薰子 (1992) . 「ある日本語習得児の観察記録」 『えちゅーど』 22, 117-130.
- 松藤薰子 (2024) . 「身体部位を表す所有表現の多様性とその表現の獲得について」 『日本獣医生命科学大学 教職教育研究』 2, 1-26.
- Meira, M. and Grolla, E. (2024). The "Growing Trees" Approach and the Development of the Left Periphery in Brazilian Portuguese. In Weicker, M. et Al. (eds.) *Empirical and Theoretical Approaches to Language Acquisition: A Generative Perspective* (pp. 64-87). Cambridge Scholars.
- Miyagawa, S. (2017). Topicalization, 『言語研究』 152, 1-29.
- Miyata, S. (1992). 'Papa *wa*?': A Study on Children's Questions Including the Particle *wa*. *Bulletin of Aichi Shukutoku Junior College* 31, 151-155.
- 南不二男 (1974) . 『現代日本語の構造』 大修館書店.
- 野田尚史 (1996) . 『新日本語文法選書 1 「は」と「が」』 くろしお出版.
- 大久保愛 (1967) . 『幼児言語の発達』 東京堂出版.
- 大久保愛 (1975) . 『幼児のことばと知恵』 あゆみ出版.
- Oshima-Takane, Y. et al. (eds.) (1998). *CHILDES for Japanese (2nd edition)*. Chukyo University.
- Perez-Leroux, A. T. (2024). Interpreting Variable Input. In Weicker, M. et Al. (eds.) *Empirical and Theoretical Approaches to Language Acquisition: A Generative Perspective* (pp. 8-32). Cambridge Scholars.
- Sacks, H. (1992). *Lectures on Conversation*, Vol. I. In Jefferson, G. (ed.). Blackwell.
- Sacks, H. and E. Schegloff (1979). Two Preferences for Referring to Persons and Their Interaction. In Psathas, G. (ed.), *Everyday Language: Studies in Ethnomethodology* (pp. 15-21). Irvington.
- Schegloff, E. and Sacks, H. (1973). Opening up Closings. *Semiotica* 7, 289-327.
- 立花隆 (1991) . 『サル学の現在』 平凡社.

- Takagi T. (2021). Requesting an Account for the Unaccountable: The Primordial Nature of [NP+wa?]-Format Turns Used by Young Japanese Children. *Journal of Pragmatics* 178, 391-407.
- Tomasello, M. (2003). *Constructing a Language: A Usage-based Theory of Language Acquisition*. Harvard University Press.
- Wexler, K. and Culicover, P. (1980). *Formal Principles of Language Acquisition*. MIT Press.

Analysis of the Marker *Wa* in the [NP + wa?] Format in Early Japanese Language Development

MATSUFUJI, Shigeko

Laboratory of the English Language

Nippon Veterinary and Life Science University

Abstract

This study examines the function of the marker *wa* in the [noun + *wa*?] format used by children during the early stages of Japanese language development. The findings of previous research indicate that children begin using the fixed expression [noun + *wa*?] with a rising intonation from approximately the age of two—the first stage of Japanese grammatical development. They employ this structure when recognizing an unexplained aspect of the referent expressed by a noun and ask questions to prompt a listener for an explanation. Subsequently, they produce declarative sentences such as [noun + *wa* + noun] and partial declarative forms such as [noun + *wa*]. While previous studies consider *wa* in the [noun + *wa*?] format a topic marker, the current study, which presents an analysis based on linguistic features observed around the age of two, the phonetic characteristics of *wa*, and the usage contexts, proposes that it primarily functions as a contrastive marker. It then discusses this function in light of Noda's (1996) theory, which posits that the topic and contrastive uses of *wa* exist on a continuum based on the prototype theory. Additionally, it considers the structural property of the topic marker *wa*, which divides a sentence into two major parts, namely, topic (entity) and comment (property). Lastly, it argues that after the abovementioned age, children must learn expressions that correspond to varying degrees of contrast and acquire the structural characteristics of the topic marker *wa*.